國際學界動向

研究會議「洞天福地與東亞文化意象」報告

土屋昌明

二〇一八年十月二十四日午前、北京の清華大學建築設計研究院で「洞天福地と東アジア文化イメージ（洞天福地與東亞文化意象）」という研究會議が開催され、先日亡くなられた當學會理事のクリストファー・シペール教授ほか、當學會員三名（大形徹、鈴木健郎、筆者）が招かれて參加したので、關連の話題も含めて、本稿で簡單に紹介したい。

本會議は、清華大學國家遺產センターと清華大學建築設計研究院文化遺產保護センターの主催により、「洞天福地」の文化的意義とその東アジア文化におけるイメージを討論するものであった。「洞天」という考え方は、山中の洞窟内の神仙世界をさすものとして、東晉末までには成立していたと考えられている。唐の司馬承禎のときに、祥福の地をさす「福地」と結びつき、十大洞天三十六小洞天七十二福地それぞれに棲んで主宰する神仙や領域がまとめられた。そのあと現在に至るまで、この概念は一種の文化裝置として、いろいろな文化的營爲に作用し續けてきた。今回の會議は、その洞天福地を文化遺產保護の射程のもとに專ら討論する點で、おそらく最初の試みだと思われる。

洞天福地の所在地、洞天福地たる所以など、不明な點が多いが、少なくとも道教の修行や煉丹にかなった場所だったはずで、だとすると、優れた山水があり、藥草や鑛物をはじめとする產物が豐かな場所だったことになる。地形や氣候が變わってしまった現在でも、その場所が優れていることが感じ取れる場合もある。多くの場合、道觀が建っており、道教徒が實踐をおこなっている。こうした文化と自然の結びつきは、中國の歷史の根底に流れ續けた水脈のようなもので、これを榮養として中國文化は花開いたと言っても過言ではない。これをいかにして保護するかは喫緊の課題である。

今回、この課題に向けて本會議を招集したのは、清華大學建築學院・清華大學國家遺產センター主任の呂舟教授であった。彼は中國古遺跡保護協會（ICOMOS-CHINA）の副主席でもあり、文化遺產保護の教育研究と實踐に從事し、この方面の規定や方策の立案に關わってきている。呂舟教授ほか關係者が具體的に考えているのは、洞天福地を世界文化遺產候補として中國政府に申請する準備をすることであった。

當日は、まず呂舟教授から本會議の趣旨說明があり、洞天福地の環境保護の重要性が强調された。そして、つぎのような研究發表がおこなわれた（以下、敬稱略）。

クリストファー・シペール「洞天福地—中國傳統文化における自然哲學と道教の自然保護區」は、多彩な寫眞や文獻を使って、古代以來の世界の宗教聖地における自然保護の狀況を通覽したうえで、道教の文化遺跡が、自然環境を保護し生物の多樣性を維持する點で突出した特徵を備えており、中國哲學が戰國時代以來、自然環境を重視して宗教思想的な重要性を與えてきたことを論證した。[1] シペール教授は二〇一三年から、世界自然基金會（WWF）の協贊のもと、「愛山基金會（Aishan Foundation）」を設立し、洞天福地の研究と保護につとめてきたよしである。その基本的な研究方法は、文化史研究に動植物の環境史と自然資源の知見を合わせたものをめざしている。[2] それにより、現在の世界の環境問題の打開策を考えようとする志向を持っている。

張廣保「唐以前筆記小説における洞天福地」は、道教の洞天福地や水府の觀念を唐代以前の文獻に博くあたり、洞天の觀念に分類を與えようとした試みであった。

大形徹「王屋山と天壇」は、唐の司馬承禎の『天地宮府圖』で王屋山が、第二小洞天から第六小洞天である五嶽をひかえて第一に位置附けられている點に、五嶽を祭祀する唐代の儒教をおさえて道教を上位に置こうとする司馬承禎の考えが反映していることを指摘した。

土屋昌明「朝鮮半島の洞天福地文化」は、新羅が唐の玄宗時期に道教を受け入れ、新羅での道教儀禮實施のために玄宗は、道教經典だけでなく道士も派遣し、その道士は洞天思想にもとづいて新羅での道教儀禮をおこなった可能性があることなどを、新出土の文獻も使って論じた。

鈴木健郎「洞天福地と日本の修驗道」は、道教と日本の修驗道を多數の修驗道の實踐環境・景觀の寫眞を使って比較し、洞天福地の思考方法が日本の修驗道に影響している可能性について展望を示した。

會場は學生や研究者で滿席であった。シペール教授への期待と尊敬がホールには滿ち溢れ、上記の目標に向かおうとする大衆の熱氣が強く感じられた。私たちとしても、シペール教授の聲咳に觸れたことは多くなく、視野の幅廣さと文獻使用の鋭さ、中國語と英語とフランス語（いずれも母語ではない）の見事さに感銘を受けた。そして、殘念ながら、これが中國におけるシペール教授の最期の講演となってしまった。[3]

當日午後には、世界文化遺産の申請準備のための豫備的な話し合いがおこなわれ、洞天福地の文化的價値と自然環境的意義に關する研究會議を繼續的に開催していくことが決められた。[4] ここで豫定された會議は、「首屆洞天福地研究與保護國際學術檢討會」と題して、翌二〇一九年六月二十二日・二十三日に福建省寧德で開催され、日本からは筆者のほか、當學會員の大形徹・大西和彦・二階堂善弘・酒井規史・石野一晴・廣瀨直記、非學會員の森瑞枝が參加・發表した。[5]

さて、清華大學の會議に上記三名が參加した由來を説

明しておきたい。これは、清華大學建築設計研究院所屬の建築家で、本會議の組織に重要な役割を果たす陶金との意見交換において、私たちがいくつかの提案をおこなってきたからである。

私たちは、現地調査の一環として二〇一三年三月二十一日に茅山を訪れ、茅山道院の楊世華道長から、たまたま茅山道院の修築再建の仕事に來ていた陶金を紹介された。彼はそのときすでに道教と茅山の歴史を研究しており、(6) 話題にのぼったのが、洞天の環境破壞と保護の問題であった。私たちは、現地の景觀と文獻記述を對照させながら、歴史地理學的な手法を導入したいと考えていたが、第一回（二〇〇九年）の天臺山桐柏宮の調査からして、洞天の環境破壞と景觀の變容に直面したのである。洞天に建築されたと思われるもとの桐柏宮は、中華人民共和國建國後のダム建設で、傳來物もろともダム湖の水底に沈んだ。その近邊に洞窟が存在したかどうかすら不明であった。(7) 茅山の場合も、古來の參道は今と違って大茅山の西側の丘陵地を歩いて登ったようだが、現在はダム湖に水沒している。陶金はこれを踏まえたうえで、ダム湖の西へりから船に乗ってダム湖を横斷して着岸し、現在の華陽洞の方向に登る參道を設計しているとのことであった。とはいえ、これは環境變化への適應に屬するもので、保護ではない。環境破壞のもっとひどい例は第二大洞天の委羽山で、市街地化で隣接の工場が稼働しているために排水汚染がひどく、せっかくの湧水が惡臭を放っているばかりか、山中のあちこちには墓地が作られている。これは工場や周邊住民の理解と協力、保障が必要である。私たち外國人からのこうした意見は、陶金にとって耳の痛い話だったにちがいない。環境變化に適應する設計だけでなく、環境保護について中國側の意識向上に協力しあうことを約束したのである。

また、本會議の準備段階で私たちから提案したのが、東アジア的な視野であった。中國の道教研究では、韓國・日本・ベトナムなど、明らかに道教の影響を受けた東アジア諸地域に對する關心が薄い。それは、陶金らもそうだが、道教の「本土」性を重視するために、東アジ

アに對する道教の影響は視野の外になってしまうのだと思われる。陶金の考えでは、洞天福地は山居を主とする點で「本土」性を備え、都市の宗教だった佛教は中國に傳來してから「山林化」したのであり、必要なのは、日本の多くの道教研究のように、佛教を主軸にして道教がその影響を受けているとする研究より、「本土」性あるいは「在地」性を重視した研究であるという。このような見方をめぐって、私たちが提示した東アジア的な視野により、少なくとも日本における山居を主とする山嶽信仰（つまり在地的な修驗道）と道教の共通性・影響の認識が彼らにも生じ、今後の共同研究が構想されるようになった。(8)

以上、本會議の概要と意義、それに至る由來の一端を紹介した。本會議の動機に對しては、シペール教授の環境保護活動だけでなく、洞天をめぐる私たちの觀察行動と研究成果がある程度作用したと言っても許されるだろう。

註

（1）施舟人 Kristofer Schipper: 洞天福地 Natural Philosophy in Traditional Culture（講演錄畫）https://www.youtube.com/watch?v=fySUIPG2v-4

（2）クリストファー・シッペール「第一洞天：東寧德霍童山初考」拙譯『洞天福地研究』第四號、二〇一三年六月、三～九頁。

（3）筆者による「シッペール先生追悼」に本會議での一コマを書かせていただいた。『洞天福地研究』第十號、二〇二一年三月。

（4）「洞天尋隱・記念　施舟人：中國傳統文化中的自然哲學及其影響」『澎湃新聞』二〇二一年二月二十六日に寫眞がある。https://m.thepaper.cn/yidianpromDetail.jsp?contid=1146427 8&from=yidian

（5）酒井規史「「首屆洞天福地研究與保護國際學術檢討會」參加報告記」『洞天福地研究』第九號、二〇一九年十一月、七〇～七六頁。同じ號に同會議に對する李豐楙の學術總括講演全文（酒井譯）、廣瀨直記の發表「二許と洞天」の論文も載せているほか、大西和彥の發表「ベトナム東北部ドンチェウ地域の福地《抱福巖》とその周邊」の論文は『洞天福地研究』第十號に載せている。

（6）陶金「茅山宗教空間の秩序・歷史的發展のコンテキストの探求と再建」拙譯『洞天福地研究』第四號、二〇一

三年六月、六九～八九頁。

（7）二〇一九年の再度の調査では、山中の溪谷に「洞」の字の見える摩崖碑を發見したが、その崖の上部にあると傳說される洞窟には、危險なため登攀できなかった。辻拓朗「浙江省における洞天福地の內部と周邊及び道士の現狀の調査報告」に紹介がある。『洞天福地研究』第九號、八八～一一一頁。

（8）『澎湃新聞』「洞天尋隱記」に『洞天福地研究』に發表された論文などが、陶金らによってつぎつぎに中國語で飜譯發表されている。https://www.thepaper.cn/newsDetail_forward_100481

寄稿規程

編集委員會

一、寄稿者は本學會員に限ります。
二、枚數制限は以下のとおりです。必ず完全原稿でお願いいたします。
　論考　四百字詰四十枚程度
　研究ノート　四百字詰二十枚程度
　書評・新刊紹介　四百字詰十枚程度
　國際學界動向　四百字詰十枚程度
　なお、論文寄稿の場合には、左記の論文要旨を添附してください。
　○外國語による論文要旨
　　要旨の作成は原著者に一任いたしますが、編集委員會が校訂する場合があります。外國語は原則として英語とし、語數は三百語程度とします。中國語表記はウェード方式、あるいは拼音（ピンイン）方式でお願いいたします。
　○外國語による論文要旨の日本語原文
　　投稿に際してはホームページ上の寄稿要項、原稿整理票を參照してください。
　○本誌に掲載された原稿は、發行より三年經過した後にウェブ上にて公開されます。ウェブでの公開を承諾されない方は投稿時にお知らせ下さい。
　　なお公開される場合も著作權は執筆者にあります。（詳しくはホームページをご覽ください。）
三、**原稿締切は、六月二十日、十二月二十日といたします。**
四、內容は未發表のものに限ります。採否は、當學會に御一任ください。
五、拔刷を御希望の方は、有償でＰＤＦファイルまたは印刷冊子を作成いたします。
六、特殊製版（圖版・寫眞版など）、組み替えなどの費用は寄稿者の負擔となります。

送付先　〒305-8571　茨城縣つくば市天王臺一-一-一
筑波大學人文社會科學研究科　歷史・人類學專攻　丸山宏研究室內
日本道教學會事務局
電話　〇二九―八五三―四〇五〇
E-mail: info@taoistic-research.jp